九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

久留米俘虜収容所における演劇活動 (1)

津村, 正樹
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/4264

出版情報：言語文化論究. 12, pp.35-48, 2000-08-31. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

久留米俘虜収容所における演劇活動(1)

津 村 正 樹

序

筆者の目の前に60枚ばかりの古い、謄写版刷りと思われる印刷物のコピーがある。オリジナルはおよそ横16センチ、縦23センチほどであろう。それは、演劇上演のプログラムである。日付が書いてあり、一番古いものは1915年8月18日水曜日となっている。今から85年ほど昔のものである。丁寧にカットを入れて装飾してあり、文字はときおり旧ドイツ筆記体的要素が入るものの、おおむねきちんと読みやすく書かれている[1)]。1、2カ所、書き直したためであろう、字が重なっていて、そのために判読不可能の部分などもある。どれを見ても、書いてあることがらはおおむね同じである。つまり、頭にはまず「俘虜収容所の劇場　久留米・日本」とタイトルが入っており、その下に年月日が書いてあり、その下には「作品名・演目」、「作者名」、「劇の種類」、「演出者名」があり、その下には、最も広いスペースをとって、登場人物名とそれを演じる俳優の名前が書いてある。その下には、時代はいつごろであるとか、場所はどこであるとか、1幕と2幕の間には14日間の時の経過がある、などといったちょっとした注が書いてあったりする。あるいはまた、たばこは吸わないようにとか、席はできるだけ詰めてお座り下さいとかいったお願いが書いてあることもある。そして、入場料が書き入れてある。将校席はいくらで、兵卒席はいくらであるとか、あるいは、5列目までは50銭で、6列目から9列目までは20銭、10列目から12列目は10銭とか。劇の内容を詳しく説明するようなものではない。ほとんどの場合が1枚の、ときに2枚にわたる、簡単な上演プログラムである[2)]。

Theater des Kriegsgefangenenlagers
KURUME: JAPAN

IM MÄRZ 1910

„Der Raub der Sabinerinnen"

Schwank in 4 Akten von Franz u. P. von Schönthan

PERSONEN:

Martin Gollwitz, Professor — Nickel
Friderike, dessen Frau — Bieger
Paula, deren Tochter — Engelhardt
Dr. Neumeister — Roth
Marianne, seine Frau — Buschow
Karl Grob — Rettig
Emil Grob, gen. Sternek, dessen Sohn — Gadebusch
Emanuel Striese, Theaterdirektor — v. Bobers
Roja, Dienstm. bei Gollwitz — Düpper
August, Diener bei Neumeister — Selewsky
Meißner, Schuldiener — " "

Der 1. 3. u. 4. Akt spielt bei Prof. Gollwitz.
Der 2. Akt bei Dr. Neumeister

Zwischenaktsmusik:
(ausgeführt von der Kapelle Lehmann)
1. Ouvertüre zu dem Schwank „Der Raub der Sabinerinnen" v. A. Lehmann
2. „Liebeserwachen" Walzer — Moulinieux
3. „Das Herz am Rhein" Lied — Hill.
4. „Die Holzsoldaten" Char. Stück — Bratton

Tag und Stunde der Aufführung wird noch bekanntgegeben. Spielleitung: A. Bieber.

PREISE:

Die ersten 4 Reihen res. Platz . . 50 sen
Die übrigen Reihen " " 20 sen

写真1　『サビニ人の娘たちの誘拐』(1916年3月上演)のパンフレット

いきさつ

ヨーロッパで第一次大戦が戦われている時期、イギリスと日英同盟を結んでい

た日本は、実際はことさらに参戦の義務があったわけではなかったが、大陸における利権を求めて、1914年８月23日青島のドイツ軍に対して戦線を布告する。圧倒的な軍事的優勢を誇る日本軍の攻撃の前に青島は11月７日に日本軍の手に落ちる。ドイツ軍の降伏をもって、日本の局地的な「第一次世界大戦」は終焉を迎える。その結果生じたドイツ人俘虜はその数4600名あまりであった。彼らは、日本に移送され、様々の形態で俘虜生活を、1920年４月１日までのおよそ５年５ヶ月の間体験することとなる。かれらは当初12の都市の収容所に分けて収容されたが、最後まで存続した収容所は、習志野（千葉）、板東（徳島）、久留米（福岡）、似島（広島）、青野原（兵庫）、名古屋である。そこに収容された俘虜の人数は、前者３カ所が1000名前後、後者３カ所が500名前後である。

彼らドイツ人俘虜の収容所生活に関しては、これまでに『板東ドイツ人捕虜物語』（林啓介）[3]や『板東俘虜収容所』（冨田弘）[4]や『松山収容所』（才神時雄）[5]などの単行本が発刊され、また、収容所のあった町において展示会が行われたり[6]、その際などにパンフレットや冊子などが発行されて、さまざまの情報が少しずつ知られるようになってきている。

今回は、この上演プログラムと、大正３年と４年に俘虜情報局が編纂した俘虜名簿、そして、久留米市役所の文化財保護課が入手し、保存している写真やコピーなどを主な資料として、当時の久留米のドイツ軍俘虜収容所における演劇活動がどのようなものであったのか考えてみたい。極めて乏しい資料しかないから、今回は詳しいところまで立ち入るわけにはいかないが、これがおそらく、第一次大戦の結果生じたドイツ人俘虜の、日本における収容所生活の中の演劇活動を対象として取り上げた最初の文章であろうと思われる。拙いものでしかないが、これがひとつの契機になって、ほかの収容所における演劇活動に関するさらなる情報の発掘や整理に結びついていけば、望外である。

上演演目

プログラムを整理して、久留米俘虜収容所における上演作品のリストを挙げてみる。催し「演劇」は常に演劇を上演したわけではなく、時には方言を使った演芸会とか、歌唱の会なども行ったのであるが、このリストでは演劇の上演のみを挙げた。最初の番号は筆者が整理のためにつけた通し番号である。日付が完全でないものは、パンフレットに明確に記されていないものである。作者名が欠けているものもある。演出者はむろん俘虜であるが、これも書かれていないものもある。

1．1915．8．18　『ベルリンっ子』（笑劇）　K. トロイホルツ作
2．1915．8．25　『義理の叔父のペッヒマイヤー』（笑劇）
3．1915．9．1　『巨大児』（笑劇）　水兵ザレヴスキ作　ザレヴスキ演出
4．1915．9．1　『ああ、何て女たち！』（笑劇）水兵ザレヴスキ作　ザレヴスキ演出
5．1915．9．18　『インディアンたち』（一幕物）ビーガー演出
6．1915．9．29　『運命的な結婚プレゼント』ガーデブッシュ演出
7．1915．9．29　『青』（喜劇）M. ベルンシュタイン作　ガーデブッシュ演出
8．1915.10.13　『二人きりで』（喜劇）L. フルダ作
9．1915.12.　『山番小屋で』（劇）R. スコヴァネク作
10．1915.12.　『第六感』（笑劇）B. モーザー＋R. ミンク作　ガーデブッシュ演出

11. 1916. 1.28 『放り出されて』（茶番劇）H. ミュラー作　ロート演出
12. 1916. 1.28 『鶴先生の診察時間』（笑劇）A. ライヒ作　ロート演出
13. 1916. 3. 『サビニ人の娘たちの誘拐』（笑劇）F. ＋P. シェーンタン作　ビーバー演出
14. 1916. 3. 『ハンス・フルケバイン』（笑劇）ブルーメンタール＋カーデルベルク作　ロート演出
15. 1916. 4.23 『シメク家』（笑劇）G. カーデルベルク作
16. 1916. 5. 『評議員殿』（喜劇）シェーンタン＋カーデルベルク作　ビーバー演出
17. 1916.聖霊降臨祭 『アルト・ハイデルベルク』（劇）W. M. フェルスター作　ハリアー演出
18. 1916. 9. 『お似合いの燕尾服』（喜劇）G. ドレディ作　ビーバー演出
19. 1916.10. 6 『教育者フラックスマン』（喜劇）O. エルンスト作　ビーバー演出
20. 1916.12.25 『クリスマスツリーの下で』（性格描写）J. H. ギアース作　ニッケル演出
21. 1917. 1.26 『こわれ甕』（喜劇）H. クライスト作　ハリアー演出
22. 1917. 2.28 『ハートのクィーン』（喜劇）M. ベルンシュタイン作　ビーバー演出
23. 1917. 2.28 『新婚旅行』（喜劇）R. ベネディクス作　ビーバー演出
24. 1917. 3.24 『ローレ』（『解放されし者たち』より）（一幕チクルス）O. E. ハルトレーベン作　ハリアー演出
25. 1917. 3.24 『困惑の花嫁』（笑劇）K. クリーク作　ニッケル演出
26. 1917. 4. 『一等車』（農民笑劇）L. トーマ作　ハリアー演出
27. 1917. 4. 『神童フリドリン』（一幕喜劇）H. シュトゥルム作　ガーデブッシュ演出
28. 1917. 7.13 『私が戻ったとき』（笑劇）ブルーメンタール＋カーデルベルク作　ハリアー演出
29. 1917. 8.17 『ロッテちゃんの誕生日』（喜劇）L. トーマ作
30. 1917. 9. 『罰としての休暇』（喜劇）モーザー＋Th. トロタ作　ビーバー演出
31. 1917.10. 『ミンナ・フォン・バルンヘルム』（喜劇）G. E. レッシング作　ハリアー演出
32. 1917.11.23 『電話の秘密』（笑劇）H. ハウスライター＋M. ライマン作　ビーバー演出
33. 1917.12. 『そう？』K. ツィーグラー作　ハリアー演出
34. 1918. 1.26 『アンドレア親方』（喜劇）E. ガイベル作　ツァイス演出
35. 1918. 4.01 『ドイツの小都市市民』（喜劇）A. コッツェブー作　ハリアー演出
36. 1918. 4.18 『教育者フラックスマン』（喜劇）O. エルンスト作　ビーバー演出
37. 1918. 5.18 『クラブチェアに座って』（喜劇）K. レスラー＋L. ヘラー作　ビーバー演出
38. 1918. 6.28 『新婚の二人』（劇）B. ビョルンソン作　ビーバー演出
39. 1918. 6.28 『娘との結婚』（喜劇）A. J. グロース＋トロッカウ作　ビーバー演出
40. 1918. 7.29 『同僚クランプトン』（喜劇）G. ハウプトマン作　ハリアー演出
41. 1918. 9.11 『チャーリィの叔母』（笑劇）B. トーマス作　ビーバー演出
42. 1918.10. 8 『二つの条件』（劇）一等兵ナック作

43. 1918.11.1 『ビーバーの毛皮』（喜劇）G. ハウプトマン作　ビーバー演出
44. 1918.11.29 『無分別』（笑劇）F. シェーンタン作　ニッケル演出
45. 1919.2.6 『トーニ』（悲劇）K. Th. ケルナー作　オルトレップ演出
46. 1919.2.6 『夜番』（喜劇）K. Th. ケルナー作　オルトレップ演出
47. 1919.3.1 『シュタイリッヒと息子』（笑劇）水兵ザレヴスキ作　ザレヴスキ演出
48. 1919.3.28 『アナトールの婚礼の朝（『アナトール』より）』A. シュニッツラー作　ガーデブッシュ演出
49. 1919.4.8-10 『信仰と故郷』（悲劇）K. シェーンヘル作　ハリアー演出
50. 1919.4.21 『別れの晩餐（『アナトール』より）』A. シュニッツラー作　ビーバー＋ニッケル演出
51. 1919.4.21 『義歯あるいはヴェニスの殺害』（悲話）ビーバー＋ニッケル演出
52. 1919.5.10 『魔術師』（喜劇）エミール・ゲット作　ビーバー演出
53. 1919.6.5 『御者ヘンシェル』（劇）G. ハウプトマン作　ビーバー演出
54. 1919.7. 『放蕩娘』（喜劇）L. トーマ作　ビーバー演出
55. 1919.8.14 『もうひとりの男』（劇）P. リンダウ作　ボーベルク演出
56. 1919.9.18 『ペンション・シェラー』（茶番劇）K. ラウフス作　ビーバー演出
57. 1919.10.23 『ダイナミック』（一幕物）W. カーン作　オルトレップ演出
58. 1919.11.11 『彼は夢遊病』（笑劇）O. トランディース作　ザレヴスキ演出
59. 1919.12.11 『燕尾服のレアンダー』（笑劇）W. ヴォッタース作　エンゲルハルト演出
60. 1919.12.17-18 『国民の敵』（劇）H. イプセン作　ツァイス演出

このリストに関してまず、注釈を加えておきたい。種類として、「茶番劇」と書いているのはポッセ Posse のことであり、「笑劇」と訳しているのはシュヴァンク Schwank のことである。久留米収容所の上演をほかの収容所のそれと比較した場合、その特徴の一つに、「茶番劇」や「笑劇」が多いことが言える。

ポッセとは近代以来の民衆的でコミカルな劇の一種で、芸術的造形よりも、題材的なおもしろさに重点をおいたもので、筋の流れは単純で、状況や性格に対する気の利いた諧謔を旨とし、謝肉祭劇やコメディア・デラルテの伝統につながっている。18世紀後半以降ウィーンの舞台がポッセを盛んにやり、ハンス・ヴルストとかカスパールとかいった、ドイツ語圏の人間だったら誰もが知っている喜劇的キャラクターを生み出した。その頂点をなすのがウィーンの劇作者のネストロイであり、さまざまの軽妙な独特の味を作り出している。

シュヴァンクは、15世紀以降、散文や韻文で書かれた滑稽物のことであり、もともとは劇に限ったものではなく、物語として長く存在した。オチを狙った形式で、例えば悪巧みに長けたずる賢い人間が愚者を馬鹿にするようなもので、日頃タブーとされていることとか、夫婦の間の諍いとかから題材が取られた。13世紀以降はキリスト教の説教や学校の授業の中でも使われている。シュヴァンク物語の作者として有名な人物にハンス・ザックスも入る。J. P. ヘーベルの散文小品『ラインの家庭の宝箱』（1811）などもシュヴァンクに入るものである。19世紀になって劇としてのシュヴァンクが現れ、その中でも、この久留米での上演演目にも見あたる、シェーンタン兄弟の『サビニ人の娘たちの誘拐』（1885）や

トーマの『地方鉄道 Lokalbahn』(1902) などが有名である。ついでに書いておくと、このトーマの作品は昭和4年発行の『世界戯曲全集』の第15巻に『枝線鉄道』として伊藤武雄訳で掲載されている。その解題の中で北村喜八はこの作品を「風刺が饒舌に流れて、真に優れた芸術品としての緊縮した力強さと迫力に欠けているように思える」[7]と書いているが、それは筆者の見るところでは、空元気でお上に楯突き、気勢を上げ、しかしすぐにしぼんで、それを後悔して、自己保身に回るというドイツ市民の様態を、卓越した劇的緊張の中で表現しきった佳品である。

上演作品の全体を眺めてみると、笑劇が18、茶番劇が2、喜劇が22、劇(Schauspiel)が8、悲劇が2、一幕物が2、その他が6である。のべ60の劇作品がおよそ5年5ヶ月の間に上演されたことになる。月に1作弱である。

どのような劇が好んで上演されたのかを知り、久留米収容所における上演のイメージを得るためには、上演作品の全テキストがほしいところであるが、文学史、演劇史にはっきりと名を残していて、テキストが容易に手に入るのは、フェルスター、クライスト、レッシング、ビョルンソン、ハウプトマン、シュニッツラー、イプセンくらいのものである。マイヤーの百科事典や、キントラーの文学史事典などに項目として出てくる作家たち、フルダ、シェーンタン、ブルーメンタール、カーデルベルク、エルンスト、ベネディクス、ハルトレーベン、トーマ、シュトゥルム、ツィーグラー、コッツェブー、シェーンヘル、リンダウ、ガイベルなどの作品のテキストは、ドイツの図書館などを使えば入手することができると思われる。次の機会には、入手できたテキストをもとに、もう少し詳しく個々の作品に入り込んでみたい。

一応、それがどのような作家たちであったかを、ここで簡単に解説しておきたい。(下線を引いた作品は、日本の俘虜収容所で上演にかかったものである)

・オットー・エルンスト (1862-1926)：1883年から1900年までハンブルクの小学校教師をしていたが、『今どきの若者 Jugend von heute』(1900) と『教育者フラックスマン Flachsmann als Erzieher』(1901) の作品で、当時もっとも成功を収めた舞台作家となった。

・グスタフ・カーデルベルク (1851-1925)：ペスト生まれのオーストリアの俳優兼舞台作家。上質で無難な劇を書いている。シュヴァンクやオペレッタも少なくない。ブルーメンタールやシェーンタンとの共作がある。有名な作品は『白馬亭にて Im weißen Rössl』(1898)。

・カール・テオドール・ケルナー (1791-1813)：フライベルクの鉱山大学で学んだ後、ワイマールに行き、そこでフンボルトやシュレーゲル、アイヒェンドルフなどと親交を結んだ。この町で女優アントニー・アダムベルガーと婚約し、1813年には宮廷劇場作家に任命される。リュツォフの義勇軍に参加し、戦争と自由を歌う歌曲を作り、それは彼の死後『竪琴と剣 Leyer und Schwert』というタイトルで出版された。劇作の才能と言語表現力は低くはなかったが、あまりに拙速な創作に流れ、内容の乏しい娯楽喜劇と、シラーをまねた悲劇以上のものは作り出せなかった、と現在では評価されている。悲劇に『ツリニ』(1812)、『ロザムンデ』(1814)、『トーニ』(1815)、喜劇に『夜番』(1815)、『ブレーメンのいとこ』(1815)、『女家庭教師』(1818) などがある。

・アウグスト・フォン・コッツェブー (1761-1819)：ここで説明を入れることが不適当なほどに有名な作家ではある。ワイマールで弁護士をしたあと、1781年にロシアに行き、裁

判所長などの重責を果たしたが、1795年にナルヴァ近郊の別荘に戻る。1797年に宮廷劇場作家としてウィーンに赴き、2年間そこで働いて、1800年にロシアに向かうが、その途中に逮捕され、シベリアに送られる。4カ月後に釈放され、その拘留がいわれのないものであったとして多額の補償金を受け取り、その上ペータースブルクのドイツ劇場支配人に任命される。皇帝パウル1世の死後ワイマールに行き、ゲーテとシラーの仲を裂こうと画策するが、そのことで逆に自分の方がこの町に居づらくなり、1803年にベルリンに移る。そこでゲーテとロマン主義者たちに敵対する雑誌『腹蔵なきもの Der Freimütige』を刊行する。ナポレオンを避けてケーニヒスブルクに逃れ、ここで雑誌『蜂 Die Biene』や『こおろぎ Die Grille』を刊行して、ナポレオンを批判する。1813年にロシアの枢密顧問官に任命される。この地で劇場の芸術担当責任者となる。1817年以降はドイツのさまざまの町に滞在し、ロシアの退職官吏としてドイツ事情に関してペータースブルクに報告を送る。1818年創刊の『文学週刊誌 Literarisches Wochenblatt』の中でドイツの学生組合ブルシェンシャフトの自由主義的理念や愛国主義的理想を揶揄したために、ドイツの統一と自由に敵対する者と見なされた。イェーナの熱狂的なブルシェンシャフト組合員であった K. L. ザントによって刺殺された。劇作は200以上を数える。イフラントとともに、当時優勢だった娯楽劇の作家として外国でも成功を収めた。ゲーテはワイマールの劇場責任者をしていた時代に、自分の敵対者であるコッツェブーの作品を90作も上演している。上演効果に関する確かな本能を持つコッツェブーはそれまでの古い騎士物を駆逐して、劇的で感覚的な家庭描写を前面に出した。シラーを模倣した作品もある。最も成功した作品は喜劇(『クリングスベルク家のふたり Die beiden Klingsberg』(1801)、『ドイツの小都市市民 Die deutschen Kleinstädter』(1803) など) である。

・フランツ・シェーンタン (1849-1913)：ウィーン出身のオーストリア劇作家で、舞台映えのする喜劇やシュヴァンクを多く書いた。弟のパウルとの共作『サビニ人の娘の誘拐 Der Raub der Sabinerinnen』(1885) は大成功を収めた。

・カール・シェーンヘル (1867-1943)：オーストリアの劇作家。ウィーンで医者をしていたが、1905年からフリーの作家。チロル方言の詩や物語を書いている。重要な作品は、故郷のチロル地方の歴史に題材をとった、筋立てのしっかりした、社会批判的な劇である。久留米収容所で上演されたただ二つの「悲劇」のうちの一つである『信仰と故郷』(1910) は彼の作品である。付言すれば、この作品は昭和4年発行の『近代劇全集』の第13巻に新関良三訳で掲載されている。反宗教改革の嵐の中で、村を追い立てられる新教派の人間たちの苦悩を描いたこの作品は、ドイツ語圏の劇文化の伝統を感じさせる佳品である。

・クララ・ツィーグラー (1844-1909)：ドイツの人気悲劇俳優。1868年から1874年まではミュンヒェンの劇場にいたが、その後はほとんど旅回りで過ごした。

・ルートヴィヒ・トーマ (1867-1921)：ここで説明を入れることが不適当なほどに、ドイツでは有名な作家である。弁護士をやったあと、一世を風靡した政治風刺雑誌『ジンプリチスムス』の編集者となり、後にフリーの作家となる。政治的強権主義、下僕根性、田舎根性に対する風刺を書いた。1907年には「大都市生活に抗して」ヘルマン・ヘッセと協力して雑誌『メルツ (三月)』を発刊した。第一次世界大戦以降、その、似非道徳とプロイセン主義に対する批判的思想と合わせて、徐々に国家主義的傾向を強めていく。代表作は日本でも翻訳されている『悪童物語』(1905) や、習志野収容所でも久留米収容所でも上演さ

れているシュヴァンク『一等車』(1910) や喜劇『ロッテちゃん（＝ロットヒェン）の誕生日』(1911) がある。また、先に触れた喜劇『地方鉄道』(1902) も彼の作品である。ドイツ喜劇文学に多大の寄与をなしている。

・オット・エーリヒ・ハルトレーベン (1864-1905)：ドイツ作家。当初は自然主義的に小市民的俗物根性を皮肉って、ウィットに富んで揶揄した作品を書いた。後には悲観主義的なものに変わっていく。その劇作品はうまくできており、舞台効果も大である。時に社会批判的テーマが加味されている。

・ルートヴィヒ・フルダ (1862-1939)：フランクフルト生まれでベルリンで活動したドイツ作家。自由劇場の共同設立者で、イプセンの影響の感じられる社会劇を作ったが、後には新ロマン主義的な童話劇などを書いた。肩肘張らない、洗練された、質のいい作品を残している。モリエールやシェークスピアの翻訳者としても名を残している。

・オスカール・ブルーメンタール (1852-1917)：ベルリン・レッシング劇場の設立者で1897年までそこの主幹を務めた。軽妙なタッチで舞台効果の高い喜劇を書いた。カーデルベルクや M.ベルンシュタインとの共作もある。論争的、批判的論文や劇評、エピグラムも残している。主要作品にカーデルベルクとの共作の喜劇『白馬亭にて Im weißen Rössl』(1898) や、M. ベルンシュタインとの共作の喜劇『大いなる中休み Die grosse Pause』(1915) などがある。付言すれば、この『白馬亭にて』は、板東収容所ではたてつづけに5回も上演された作品である。

・ローデリヒ・ベネディクス (1811-1873)：ドイツの舞台作家。俳優、歌手、舞台監督そしてフリーの作家。舞台映えのする、親しみやすい、そして質のいい状況風刺を込めた喜劇を書いた。

・パウル・リンダウ (1839-1919)：ドイツの劇場主幹で作家。編集者としてさまざまの雑誌を発刊した。1895年にはマイニンガー宮廷劇場の支配人になった。1899年にはベルリン劇場の舞台監督。1904年から1年間ドイツ劇場の舞台監督。その後、ベルリン王立劇場の文芸部に属する。長編小説、戯曲、批評、翻訳などを書いた。久留米で上演されている『もうひとりの男 Der Andere』(1893) はリンダウの主要作品に数えられるものである。

上演された作品の中には、俘虜自身の手になる作品が、水兵ザレヴスキのものが3編、一等兵ナックのものが1編あるが、これらは、むろん、入手は諦めざるをえないであろう。いわゆる「歴史に名を残した」文学作品を専ら対象にしてきた、視野の狭い筆者には、恥ずかしいことだが、現在までのところ、次に挙げる作家の作品へ辿る道がまだ見えない。トロイホルツ、スコヴァネク、モーザー、ミンク、ミュラー、ライヒ、ドレディ、ギアース、クリーク、トロタ、ハウスライター、ライマン、レスラー、ヘラー、グロース、トロッカウ、トーマス、ラウフス、カーン、トランディース、ヴォッタースの面々である。そして、プログラムで作者名が挙げられていない作品、『Die Tuscaroras（インディアンたち）』、『Das verhängnisvolle Hochzeitsgeschenk（運命的な結婚プレゼント）』が、目下のところ筆者には不詳である。インターネットが進んだ現代であるから、うまく使えば、探し当てるのは、さほど困難ではないかもしれない。

ほかの収容所の上演作品を、比較する意味で見てみよう。現在までに、久留米に次いで上演データが表に出ているのは板東である。つい最近、2000年3月31日に鳴門市が発行したガイドブック『どこにいようと、そこがドイツだ　板東俘虜収容所入門』[8)]の中に計23回

にわたる上演の日付と演目が記載してある。演目を挙げると、ズーダーマンの『名誉』（ドラマ）、シラーの『群盗』、アンツェングルーバーの『良心の呵責』（喜劇）、フライタークの『新聞記者』（喜劇）、レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』（喜劇）、ラウフスの『ペンション・シェーラー』、ハンス・ザックスの夕べ、ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン名場面』、フェルディナント・ボンの『シャーロック・ホームズ』、エルンスト・フォン・ヴィルデンブルフの『ラーベンシュタインの女』、グリフィウスの『ペーター・スクヴェンツ』、クライストの『こわれ甕』、人形劇、シラーの『ヴァレンシュタインの陣営』、カルデロンの『人生は夢』、シェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』、マイアー・フェルスターの『アルト・ハイデルベルク』、再びハンス・ザックスの夕べ、レスラーの『二頭のあざらし』、ゲーテの『エグモント』、ブルーメンタールとカーデルベルクの『白馬亭にて』、『人形劇ファウスト博士』、そしてイプセンの『社会の柱石』である。

習志野で現在までに確認されている上演演目はまだ数少ないが、久留米の演目にもあるハウスライターとライマンの共作『電話の秘密』、イプセンの『幽霊』、作者が書かれていない『親戚の情愛』と『射撃手と空くじ』、これまた久留米の演目にもある、エルンストの『フラックスマン先生（＝教育者フラックスマン）』とトーマの『一等車』や『ロットヒェン（＝ロッテちゃん）の誕生日』である。

まだ情報の少ない習志野のものとの比較はできないが、全作が、少なくともタイトルだけは表に出た板東における上演と久留米収容所におけるそれとをおおざっぱに比較すると、久留米で上演されたものの中には、いわば、現在から見ると「知名度の低い」ものが多いということは言えるのではないかと思われる。そのことは何も、久留米収容所における上演が、ほかの収容所におけるそれに比べて質が低かったなどということを意味するものではないだろう。演劇集団の嗜好や雰囲気が、上演演目の選択に反映しているのであろう。もう少し資料を手に入れてみないと正しいところは言えないが、つまり、久留米の収容所における上演は、例えば4本の自作劇上演にも現れているように、また、かずかずの笑劇や茶番劇の上演に現れているように、いくらか素人っぽくなったとしても、あるいは、「文学的な高尚さ」からはいささか離れることになったとしても、楽しみながら劇をやっていこうという雰囲気がそこにはあったのではないかと推測される。

上演に携った人々

上演プログラムにはおおむね、その作品の登場人物を演じた俳優の名前が記されている。それを俘虜名簿と対照すると、その人間の階級や出身地がわかる。ほとんどの俳優名を名簿の中に発見することができるが、中には、プログラムに書かれているのが愛称であったと思われるもの[9]、または、綴りが俘虜名簿とやや食い違うものがあったりする[10]。また、中にはフォークトのように姓しかプログラムに書いていなくて、同じ姓の人物が俘虜名簿に3名いて、同定できないものもある。

次に、久留米収容所における演劇上演に携わった人間たちのリストを挙げてみる。いささか冗長になってしまうが、当時の久留米でこのような演劇活動をやっていた、個々の構成員に敬意を表したい気持ちもあって、端折ることなく挙げてみたい。俘虜名簿には中にはドイツにおける連絡先が番地まで記してあるものがある。そこに尋ねていっても当人を知っている人間はいないそうである。当時25歳だとしたら、85年後の今は110歳になってい

るはずだし、30歳で子どもを持ったと仮定しても、その子はもう80歳で、孫が50歳ということになる。外国で暮らしている孫に探し当たることがあるくらいだそうである。

リストは俘虜名をあいうえお順に並べている。最初の数字は通し番号、その後ろは、姓名、階級、出演した上演番号、これは前に挙げた上演リストの通し番号である。肩に＊のあるものは女役であり、数字が重複しているのは同じ上演で二役を演じたことを示している。また、演出に当たった人間、作品を創作した人間は、その後ろに上演番号を記している。なお、宣誓解放とは、この戦争には決して再び自国軍兵士として加担することはないと誓って解放されたもののことである。当時はそのようなことがあったのである。（『板東俘虜収容所』参照）

1．K. アーリンゲ（水兵）・・・19, 21, 23, 34, 36, 43*, 53, 57
2．F. アダムツェック（二等水兵）・・・40
3．F. イェーネルト（副曹長）・・・17, 18, 26, 30, 34, 42
4．R. インベルク（水兵）・・・60
5．W. ヴァシュケヴィッツ（水兵）・・・1
6．R. ヴァスマイアー（宣誓解放）・・・49
7．R. ヴィースト（上等火夫）・・・55
8．L. ヴィマー（水兵）・・・28
9．E. ヴィラース（宣誓解放）・・・54
10．E. ヴィラーバッハ（水兵）・・・27, 28*
11．K. ヴェーバー（宣誓解放）・・・49*
12．H. ヴェデキント（兵曹）・・・44
13．H. エームンツ（水兵）・・・37, 40
14．H. エッガース（伍長）・・・16*, 17, 25, 30, 33, 41, 56, 59
15．L. エルヴァイナー（二等水兵）・・・28, 30, 35
16．P. エンゲルハルト（水兵）・・・3*, 4*, 5*, 6*, 7*, 8*, 9*, 11*, 12*, 13*, 14, 15, 16, 18*, 19*, 21, 23*24*, 28*, 30*, 32*, 35*, 36*, 37*, 38*, 40, 42*, 44*, 45, 47, 48*, 50*, 53*, 54*, 56, 57*, 59*　演出（59）
17．Th. オルトレップ（要塞曹長）・・・17, 19, 22, 31*, 32, 35, 36, 42, 48, 49, 52, 56, 57, 60*　演出（45, 46, 57）
18．R. ガーデブッシュ（伍長）・・・7, 8, 9, 10, 11, 12, 14, 15, 17, 18, 20, 22, 24, 26, 33, 34, 44, 49, 50, 54, 59　演出（12, 27, 48）
19．W. カルトホフ（軍曹）・・・18
20．O. K. キースリング（水兵）・・・16*, 19, 21*, 26, 29, 30*, 35*, 36, 37*, 42*, 43, 47*, 53, 56*
21．P. ギュンター（軍曹）・・・19
22．K. クノプフ（伍長）・・・17, 18
23．J. グラーフ（水兵）・・・26, 49
24．C. クライケ（伍長）・・・17, 40, 45
25．H. クラッベル（副曹長）・・・28, 31, 37, 41, 49, 60

26. O. ゲープハルト（水兵）・・・49
27. H. ゲーベル（水兵）・・・37,50
28. W. ゲルトマッハー（宣誓解放）・・・55,59
29. F. ザイゲル（二等水兵）・・・47,54*,59*
30. K. ザイナー（二等水兵）・・・28
31. H. ザウアビア（宣誓解放）・・・3，4，9，10,12,27,34,44,47,53,55
32. H. ザルトリ（宣誓解放）・・・26,28,49
33. G. ザルノフ（見習い士官）・・・33*,34*,36*,37*,39*,40*,41*,44,46,52,55*
34. G. ザレヴスキ（水兵）・・・9，13,13,16,18,19,23,30,35,52,53,58,60　演出（3，4，47,58）　創作（3，4，47）
35. F. ザントヘーフェル（二等水兵）・・・1
36. A. シャイベ（水兵）・・・5，7
37. H. シュタインバッハー（水兵）・・・12,14*,15*,16*,17*,18*,22*,23*,26*,28*,30*,31*,32*,33*,35*,37*,39*,40*,41,44*,46*,47*,49*,52*,54*
38. P. シュトラウス（水兵）・・・49*,54*
39. W. シュトレンペル（兵曹）・・・37,56
40. R. シュミット（伍長）・・・54
41. C. シュラーゲ（二等水兵）・・・1
42. W. シュルツ（水兵）・・・40
43. W. シュルツェ（上級水兵）・・・54
44. F. ゼンメルハック（宣誓解放）・・・40,56
45. F. タイレ（宣誓解放）・・・8，9，45
46. E. ツァイス（副曹長）・・・21,26,40,49,56　演出（34,60）
47. W. ツィーゼル（火薬係副下士官）・・・18
48. K. ティーデマン（伍長）・・・55,56,59
49. L. ディートリッヒ（水兵）・・・3，26,49
50. P. デマルティニ（二等水兵）・・・37
51. M. デュッパー（上等火夫）・・・9，11,13*,14*,15*,16*,17*,18,19,20*,21*,25,29*,32,33*,34,35*,36,39,40,41,47*,52,53*,54,55,56,59*
52. G. ナーゲル（二等水兵）・・・9*,11*,15*,55*
53. K. ナック（宣誓解放）・・・演出（42）創作（42）
54. O. ニッケル（副曹長）・・・9，13,14,15,17,18,19,20,25,28,29,32,34,36,38,41,42,44,55,58,59　演出（9，20,25,44,50,51）
55. G. ネクラー（二等水兵）・・・40
56. G. ハーケ（火薬係副下士官）・・・43*,44*,45*,49*,52*,53*,54*,55,56*,58,59,60
57. A. バール（二等水兵）・・・1，6，43,49,53
58. M. ハーン（水兵）・・・32,35,36,37,39,42,49,53
59. A. パウルゼン（水兵）・・・11
60. A. バッハシュタイン（上級水兵）・・・1，17,18,19,31,34,35,36,37,49,57
61. K. ハリアー（副曹長）・・・24,59　演出（17,21,22,24,26,28,31,33,35,40,49）

62. A. ビーガー（宣誓解放）・・・5*, 13*, 14*, 15*, 16*, 18*　演出（5）
63. W. ピーク（兵曹）・・・37, 40
64. P. ビーダーマン（水兵）・・・37
65. A. ビーバー（少尉）・・・16, 17, 19, 21, 23, 30, 31, 32, 36, 37, 38, 39, 41, 43, 48, 50, 52, 52, 53, 55, 58　演出（13, 16, 18, 19, 23, 30, 32, 36, 37, 38, 39, 41, 43, 50, 51, 52, 53, 54, 56）
66. P. ヒルシュベルガー（軍曹）・・・5, 19, 30, 31, 32, 34, 36, 37, 43, 44, 45, 47, 52, 58
67. B. フィッシャー（副曹長）・・・37, 41, 60
68. J. フィッシャー（後備兵）・・・1, 43, 53, 55, 60
69. P. フィッシャー（火夫）・・・43*, 47, 53, 54*, 55*, 56*
70. ?. フォークト（？）[11]・・・1
71. J. フォスカンプ（水兵）・・・28, 37, 45
72. E. ブショフ（伍長）・・・13*, 14*, 15*, 16*, 18*, 19*, 20*, 21*, 26*, 27*, 28*, 30*, 31*, 32*, 34*, 36*, 37*, 38*, 40*, 41*, 42*, 43*, 44*, 54*
73. A. プラール（水兵）・・・34, 46, 47, 49, 53, 60
74. G. ブライシュタイン（宣誓解放）・・・53, 58
75. A. フラヴィツァ（？）[12]・・・40
76. F. ペーベル（宣誓解放）・・・3*, 4*, 6*, 8*, 9*, 10*, 11*, 12*, 14, 16, 17
77. C. ベリング（二等水兵）・・・56*
78. G. ヘルトリング（少尉）・・・演出（15）
79. J. ヘルマース（伍長）・・・17, 27, 28, 30, 31, 37, 43, 54, 55, 59
80. E. ボイムレ（水兵）・・・49, 53
81. K. ボーベルク（水兵）・・・3, 6, 14, 15, 18, 19, 20, 22, 27, 28, 29, 31, 32, 36, 40, 43, 44, 46, 47, 53, 54, 55, 56　演出（55）
82. W. ボーベルス（少尉）・・・13, 34, 40
83. H. マッツェン（宣誓解放）・・・55*
84. P. マトゥタート（二等水兵）・・・1, 9, 11, 17, 18, 25, 27, 36
85. H. ミッヘルマン（工兵）・・・10*, 11, 18*, 19*, 28*, 29*, 32*, 34, 35*, 36, 37
86. O. ミュラー（水兵）・・・34, 37
87. H. メラース（水兵）・・・37
88. K. メルク（少尉）・・・56*, 59*, 60*
89. V. B. ヤルムスケ（水兵）・・・41*
90. F. ライト（副曹長）・・・37
91. W. リーゼナー（宣誓解放）・・・55
92. E. リンネ（志願兵）・・・15, 19, 27, 36, 42, 45, 53
93. J. ルンツラー（二等水兵）・・・55
94. F. ルンテムント（上級水兵）・・・27, 42, 45
95. M. レーデ（伍長）・・・56*, 59*
96. H. レッティヒ（副曹長）・・・13, 14, 16, 17, 18, 19, 30, 34, 35*, 36, 37, 40, 42, 43
97. H. ロート（宣誓解放）・・・1, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 15, 16, 17, 19*, 20, 27, 28*, 29*, 32, 34, 36*, 37, 45*, 48, 52, 59*　演出（10, 14）

1300人以上の俘虜を収容した久留米収容所において、平均月１回程度の上演があり、その全体に対しておよそ100名ほどの人間がかかわったことになる。

出演回数が20回以上に上るものを上位から挙げてみると、パウル・エンゲルハルト（37回)、マティアス・デュッパー（28回)、ハインリッヒ・ロート（26回)、エルヴィン・ブショフ（24回)、ハンス・シュタインバッハー（24回)、クルト・ボーベルク（23回)、リヒャルト・ガーデブッシュ（21回)、オット・ニッケル（21回)、アルトゥール・ビーバー（21回）となる。

また、演出に当たったのは、アルトゥール・ビーバー（19回)、クルト・ハリアー（11回)、オット・ニッケル（６回)、グスタフ・ザレヴスキ（４回)、リヒャルト・ガーデブッシュ（３回)、テオドール・オルトレップ（３回）などである。

将校であったビーバーは演出も多かったが、出演回数も多い。演出の多い副曹長のハリアーは専ら演出の方に回ったようで、出演はただの２回である。

ちなみに、女性役をやる人間はほとんど決まっていたようである。例えば出演回数第１位37回を誇るパウル・エンゲルハルトなどは、そのうちの３分の２以上の29回までが女性役である。あるいは、エルヴィン・ブショフなどはその24回の出演のすべてが女性役である。ボーベルク、ガーデブッシュ、ビーバーそしてニッケルのように出演回数は20回以上を数えるのに、決して女性役が回ってこなかった人間も少なくない。

女性役としての出演回数を上位から挙げれば、パウル•エンゲルハルト（29回)、エルヴィン•ブショフ（24回)、ハンス•シュタインバッハー（23回)、オット•キースリング（９回)、フリッツ・ペーベル（８回)、ゲオルク・ザルノフ（８回）となる。

中には、出演回数は少ないが、その出演のすべてが女性役だったアルベルト・ビーガー（６回）ゲオルク・ナーゲル（4回)、カール・メルク（３回)、パウル・シュトラウス（２回）といった人間もいる。女性に不足する収容所演劇上演においてはさしずめ女性役のピンチヒッターとでもいうところだったのであろう。

上に挙がった人間たちが中心となって収容所内の演劇活動を行っていったものと思われる。ことに、演出回数の多い、アルトゥール・ビーバー少尉、クルト・ハリアー軍曹、オットー・ニッケル軍曹、ザレヴスキー水兵、リヒャルト・ガーデブッシュ伍長、それに加えて、出演回数を誇るパウル・エンゲルハルト水兵、エルヴィン・ブショフ伍長、マティアス・デュパー上級火夫、ハインリッヒ・ロート一等兵、ハンス・シュタインバッハー水兵などを中心とした活動であったと思われる。上演プログラムを束ねたものに付けられた表紙と思われるページのコピーには「久留米（日本）俘虜収容所の劇場」の下にただ、引率者や導き手を意味する「ライター」というドイツ語に続けて、副曹長 K. ハリアーと書いてある。クルト・ハリアーが、久留米収容所の演劇活動の最中心であったようである。

おわりに

習志野でも板東でも、そして久留米でも、規模や演目の傾向などの違いはあったとはいえ、同じような形でオーガナイズされ、そして実践されたということは、考えてみると驚嘆に価することである。むろん、そこには、様々な形での収容所間の情報交換はあったようである。板東で発刊されていた収容所新聞『ディ・バラッケ Die Baracke』がほかの収容所においても読まれていたということなどがある。しかしそれにしても、われわれ日本

↑　　↑　　↑
クラッベル　　シュタインバッハー　オルトレップ
（＝リッコー）　（＝フランツィスカ）　（＝ミンナ）

写真2　レッシング作『ミンナ・フォン・バルンヘルム』
1917年10月上演　演出：ハリアー　第4幕第2場

人にとっては、やはり、このような、活動の共通性が歴史的に存在したということは驚きである。それは、そうすることが、彼らドイツ人にとっては、極めて自然で、当たり前のことであったから、つまり、それは、本国における彼らの動きを写しているはずの、欲求であったということを表しており、それはやはり驚嘆に値することだと思われる。そのようなものが、まさに、その国の文化の厚みとでも言えるものであろうかと思われる。

今回は単なるとっかかりであったが、次回は、もう少し個々の作品の中に入り込んで論じたい。また、久留米では50回目の上演のあと、『上演を振り返って』というパンフレットが出版されていて、その中では、上演や観客の反応などが簡潔に叙述されている。そのようなものを手がかりにして、もう少し詳しく具体像に迫りたいと思う。

【注】

1）このコピーは、久留米市役所教育文化部文化財保護課の依頼を受けて、当時熊本大学法学部の留学生だったニコーレ・ツィングスハイム Nikole Zingsheim さん（現ボン在住）が、その全文をテキスト化している。筆者もそれを参考にさせていただいた。そのことを、感謝の意味を込めてここに記しておきたい。
2）このコピーのオリジナルは、ドイツのライプツィヒ図書館に所蔵されている。
3）『板東ドイツ人捕虜物語』林啓介、チャールズ・B. バーディック、ウルズラ・メスナー著　海鳴社　1982年
4）『板東俘虜収容所－日独戦争と在日ドイツ俘虜』冨田弘著　法政大学出版局　1991年

5）『松山収容所』才神時雄著　中央公論（現在絶版）
6）例えば、『特別史料展　ドイツ兵士の見たＮＡＲＡＳＨＩＮＯ　1915－1920　習志野俘虜収容所』2000年１月15日～1月30日　習志野市教育委員会主催
7）世界戯曲全集刊行会発行『世界戯曲全集第15巻』（1929年）P.541-542
8）『どこにいようと、そこがドイツだ－Hie gut Deutschland alleweg!－板東俘虜収容所入門』鳴門市ドイツ館史料研究会編集　鳴門市発行　2000年３月31日
9）プログラムにおける表記と、それに対応すると思われる俘虜名簿の表記を、その順に記して、例を挙げると、Willy Schulze → Wilhelm Schulze、Jonnie Helmers → Johann Helmers などがある。
10）注９と同じ順でその例を挙げると、Mattutat → Matutat、Eggersh → Eggerss、Satori → Sartori、Vosskamp → Voskamp、Carl → Karl、Curt → Kurt などがある。
11）本文42ページ参照
12）階級名はどちらの俘虜名簿においても Marsgast となっているが、この単語が筆者には未詳である。